

## 江戸期における蘭学の誕生

岩崎 允胤

日本は東アジア諸国のなかでいち早く近代化を達成し、20世紀後半、敗戦による廃墟のなかから急速にめざましい復興をとげ、ついに世界先進資本主義諸国の列に加わるにいたったが、そうなるには、明治維新以来近隣の諸国に先んじて西欧の近代文化、とくにその科学技術の積極的な吸収・摂取に成功したことが重要な要因となっているといえよう。そして江戸時代にこの吸収・摂取のための一つの不可欠な前提をなしたものとして、西欧の学問すなわち洋学を導入したということがある<sup>(1)</sup>。

いま「洋学」といったが、この語が、たんに当初における蘭学の別称としてではなく、フランスやイギリスなど西欧諸国の学を含むもっと広い一般的な用語として使われるようになったのは、幕末の開港以後のことである。そこでまず、幕末期に先立って——いわゆる田沼時代における貨幣経済の進展、文化繁栄の只中——、1774年（安永3年）に『解体新書』が出版され

ることによって「蘭学」の名が日本国内に広くおこなわれるようになったことが、画期的なこととして指摘される。杉田玄白（1733—1817年）はその刊行から42年後に書いた『蘭学事始』のなかでこの訳業の成就の頃を回顧し、「そもそも江戸にてこの学を創業して、腑分け〔解剖のこと〕といひ古りしことを新たに解体と訳名し、且つ社中〔仲間うち〕にも誰いふともなく蘭学といへる新名を首唱し〔はじめて唱へだし〕、わが東国<sup>にっぽん</sup> 閩州<sup>そうこくちゅう</sup>、自然と通称となるにも至れり。これ今時のごとく隆盛となるべき最初嚆矢なり」<sup>(2)</sup>と書いている。じっさい『解体新書』の出版こそは、わが国で蘭学が本格的な研究として緒に就いたという記念碑的な意義をもつ事業であったということができよう。このようにみえてくると、この事業は、日本の近代化の遠い一つの重要な起点となったのであり、江戸期におけるこの蘭学、そしてより広くは洋学の吸収・摂取の思想的意義の研究は、われわれの江戸思

(1) 日本の近代化にかんしてわたくしがかわった次のテーマでの座談会がある、「現代日本文化の形成と発展——とくに『近代化』の思想問題について——」。これは1988年8月25日、中国社会科学院『哲学研究』編集部でおこなったものである。われわれはあらかじめ準備をして会にのぞんだ。出席者は、わたくしのほか、北村実、高田純、岩佐茂、牧野広義、山本広太郎、横山れい子の諸氏である。座談会の記録は、『大阪経済法科大学論集』第36号、1989年3月に掲載されている。

(2) 杉田玄白『蘭学事始』緒方富雄校註、岩波文庫、19

59年、35ページ、引用文中「東方閩州」について、岩波版、日本古典文学大系95（次注参照）では、諸写本の振仮名「ニッホンソウコクチュウ」によって「にっぽんそうこくちゅう」と読んでおり（496ページ）、わたくしは、岩波文庫によらず、この読み方をとった。なお、緒方の注によれば、「蘭学」の「蘭」はもちろん「和蘭」の名称からとったものだが、この「蘭」は植物の華麗なランに通ずるもので、当時、ランの花を蘭学になぞらえてたたえた詩もあるとのことである。ランの花にたぐえれば、蘭学は、当時極東の一隅に華やかにも芳しく咲きいでた一本の花ともみられよう。

想史研究のきわめて重要な一環をなすといわなければならないだろう。

洋学史、とくに洋学思想史の意義については、すでに多くのすぐれた専門的な著書・論文があり、ここにわたくしが一稿を筆するのは、屋上屋を架するの<sup>まじ</sup>誹りを免れないかもしれない。しかし、江戸思想史を全体として捉えようというわたくしの一連の研究にとってこのテーマはやはり避けて通るわけにはいかない事柄である。それゆえ、先学の諸研究に多くを負いながら、ここでいちおう小論を<sup>まと</sup>纏めておきたいと思う<sup>(3)</sup>。

## 1 蘭学（洋学）誕生の諸前提

蘭学（洋学）の誕生には、その前提ともなる一定の歴史的準備が先行した。幕藩体制成立の前後からのわが国の状況をこの点にしばってまず一瞥しておこう。

南蛮学あるいは蛮学 洋学は西洋學術の略語かもしれず、要するに西洋の学問の意味をもっている。わが国でのその最初の移植は、キリシタン伝来の時期であり、当時その学は南蛮学あるいは蛮学とよばれたが、幕府のいわゆる「鎖国」政策によってほとんどが圧殺されてしまった。もっとも、イエズス会が慈善事業としておこない、日本人が初歩的なものを学んだ南蛮流の主として外科的医療は、その後も国内で伝わり\*、「鎖国」下で西洋への唯一の門戸となった長崎の出島から入ってくるオランダ流の医術

（これもその初歩的なものとどまる）によってひきつがれた。オランダの医学はポルトガル、スペインの医学、すなわち南蛮医学にたいして紅毛医学ともよばれたが、通詞がひきついだものとしては両者のあいだに根本的な相異はなかったといえよう。オランダ系の学問（——後述するように、これにはまず主として長崎の通詞がかかわったのである——）も蛮学とよばれていたようである。

\* 天正年間にルソン島に渡って外科を学んで帰国した栗崎道生のような場合もある。

オランダ通詞 「鎖国」以前には長崎にはオランダ語を話すことのできる者は通詞としてもおらず、1641年オランダ商館が平戸から長崎の出島に移されたのちも、しばらくは、オランダ通詞もじっさいにはポルトガル語で通訳の役を果たす状態であったといわれる（むしろ、オランダ側がポルトガル語を習得しておく必要があった）。その後も、せいぜい平易な日常会話しかできない者がかなり多かったであろう。『蘭学事始』には、「渡海御免の〔通航の許されていた〕和蘭にても、その通用の横行の文字〔横文字〕、読み書きのことは〔幕府が〕御禁止なるにより、通詞の輩もたゞ片仮名書きの書留等までにて、口づから〔自分の言葉で〕記憶して通弁の御用も工<sup>く</sup>辨<sup>べん</sup>せしにて、年月を経たり」<sup>(4)</sup>云々と書かれているが、そのような横文字の読み書きの「御禁止」などは当時とくになかったとされ（この点について後述）、むしろ

(3) 本稿でとくに負っているのは、日本思想大系64、65『洋学』上・下、岩波書店、1976、72年の諸校注と解説、日本古典文学大系95『戴恩記・折たく柴の記、蘭東事始』岩波書店、1964年の校注と解説、また前注の岩波文庫版の『蘭学事始』、日本の名著22『杉田玄白・平賀源内・司馬江漢』中央公論社、1971年（とくにその現代語訳）、高橋碩一『洋学思想史論』新日本出版社、1972年、佐藤昌介『洋学史研究序説』1964年、岩波書店、田崎哲郎『在村の蘭学』名著出版、1985年、板沢

武雄『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館、1958年、片桐一男『杉田玄白』吉川弘文館、1986年、小川鼎三『医学の歴史』中央公論社、1964年、木村陽二郎『日本自然誌の成立』中央公論社、1974年、藤野恒三郎『医学史話——杉田玄白から福沢諭吉——葉根出版——』葉根出版、1984年、吉田光邦『江戸の科学者たち』社会思想社、1969年等々である。

(4) 『蘭学事始』前掲書、12ページ

おおむね通詞自身がしばらくのあいだは原書を繙くという関心をあまりもたなかったという方が実情であろう。むしろ、玄白がこのように書いているのは、そう伝えられるほど横文字を読むものが少なかったことを示しているともいえるよう。

もっとも、オランダ人と接触するなかでA・パレーの外科書をなほどこか使って『紅夷外科宗伝』を著わした、通詞榎山鎮山(1648-1711年)がいる(のち、通詞をやめて医師となった)。また、ポルトガルとオランダの両流の医術を学び、のち召し出されて官医(将軍の侍医)となった西吉兵衛もいる(かれは沢野忠庵、すなわち棄教した宣教師フェレイラの弟子である)\*。また、医学の領域ではないが、西洋の諸般の事情を多く聞きとり、これを書き留めた通詞、林道栄もいる。かれは『異国風土記』を書いた。また、イタリア人シドッチが来日して捕らえられ、白石の審問を受けたとき協力した大通詞今村英生(1671-1736年)は、来日したケンペルから、とくに語学教育を受けその有能な助手となったが、かれのオランダ語の力は当時抜群であったといわれる。

\*なお、通詞ではなく、将軍家宣がまだ甲府侯のとき侍医として召出され、やがて将軍家の官医となったオランダ流外科医の桂川甫筑がいる。かれは、平戸侯の侍医で出島のオランダ人から医術を学んだ嵐山甫安の弟子である。また、桂川甫三(三代目)は、青木昆陽からオランダ語のごく初歩の手ほどきをうけた、玄白の友人である。その息子、甫周(1751-1809年)は、俊秀、若くて玄白の訳業に参加した。

ところで、こうした状況のなかで、オランダ語の著作の翻訳についていえば、何をおいても特筆すべきは、西洋解剖書の訳述を通詞本木良意(1628-97年、かの本木良永の二代先)がす

で17世紀におこなったことである。それはドイツのレムメリンの解剖書(もちろんオランダ語訳)によったものであるが、かれの存命中にはその訳業は出版されず、ようやく1772年になって『和蘭全軀内外分合図』と題して世に出た。これは『解体新書』出版のじつに二年前のことである。小川鼎三は次のようにその意義について書いている、「日本で西洋解剖書が訳されたのは杉田玄白たちの『解体新書』(1774年)が最初とふつう考えられているが、本木良意はほとんど一世紀を先んじて、おそらく独力で、そういう仕事をしていた」<sup>(5)</sup>。

『解体新書』の出版された直後になると、1775年に来日し翌年暮まで滞在したツンベリー(しばしばツンベルクともよばれる)は、その『日本紀行』に、当時通詞たちは欧州の書物を熱心に求め、東インドから来る商人から入手しようとする努力をしている、と述べている。ツンベリーは桂川甫周や中川淳庵(1739-86年)と会ったばかりでなく大通詞吉雄幸左衛門(幸作、耕牛、1724-1800年)と親しく交わった。吉雄は晩年通詞をやめ、吉雄流外科を創始し、多くの門人がかれのもとに集まった。

次に天文学の分野では、前記本木良永(1735-94年)は多数のオランダ書を翻訳した最初の人として知られる。なかでも『和蘭地球図説』(1772年)と『太陽窮理了解新制天地二球用法記』(1793年)とは地動説(太陽中心説)を記述した著作である(三浦梅園は良永の協力者松村元綱から地動説のことをきいたと自らしるしているし、司馬江漢も長崎で良永から地動説のことを耳にしたであろうと思われる)。良永の弟子が『暦象新書』(1802年)の著者として名高い志筑忠雄(1760-1806年)であり、忠雄は通詞

(5)小川鼎三、前掲書、102ページ

を早々と辞してオランダ語を専修し斯学の研究に没頭し、ニュートン力学を叙述したのである。ともあれ、「鎖国」以来『解体新書』の翻訳が始められる頃まで約130年間、後述する江戸の青木昆陽（1698－1769年）とそのわずかな弟子たちを除けば\*、オランダ語に実際にかかわった者としては、ほとんどオランダ通詞とその関係者しかおらず、出島での通弁や、カピタン（甲比丹、オランダ商館長）の江戸参礼に同伴するなどの活動を含めて、かれらの存在は、蘭学がやがて誕生するための前提をなすものであった。高橋碩一はさらに次のように書いている、「江戸に蘭学が勃興する以前の和蘭通詞を中心とする長崎の蘭学の意義は、たとえその内容が貧弱であっても、やがてかの近代思想成長の中心として起つべき任務をおびて立ち上がった蘭学の勃興にその道しるべとなり進路をひらいたと共に、自らも新たに第一線に立つことの出来る素地を養っておいた点に見出さるべきであろう。」<sup>(6)</sup>

\*野呂元丈（1693－1761年）の『阿蘭陀本草和解』（ドネウス本草書によったもの、1742－50年）は、かれがオランダ語を勉強した成果ではなく、吉宗の指示をうけてオランダ人や通詞らに聞いたところを、一書にまとめたものといわれる。

**吉宗と蘭学** 佐藤昌介は、洋学勃興の糸口が将軍吉宗による西洋学術の移植・育成によって開かれたとする見方や、さらにすすんで吉宗を洋学の開祖とさえみなす見解にたいして反対している。もとより氏は、吉宗が洋学の発展のために一定の役割を果たしたことをあえて軽視するものではないとしている<sup>(7)</sup>。わたくしも吉宗と蘭学との関係をこの方向で考えたい。たしかに吉宗は西洋の文物にたいする強い関心をもっており、カピタンの出府のさいには天文・地理・

医学・武器・船舶・時計などについてさまざまな質問をし、また長崎に人を派して書籍・動植物・望遠鏡などの発注をさせている。民衆のあいだでも舶来物への関心は高まっており、日本の文化的状況はすでにそういう時代になっていたのである。

1720年（享保3年）のいわゆる「洋書の解禁」についていえば、ときたま誤解されているように、それは横文字すなわちオランダ書の解禁をとくに意味するものではなく（前述したように、もともとそういう禁制はなかった）、漢訳された洋書の一定範囲での解禁がなされたとされている。そもそもさきに幕府から出されていた禁令とは、漢訳洋書にかんするものであった。すなわち、辻達也によれば、「寛永七年（1630年）キリスト教宣教師の手になる32種の漢訳洋書が輸入禁止となった。ついで貞享2年（1685年）禁令は一そう強化され、一言でもキリスト教に関する文句があればすべてこれを焼却または墨塗差戻し処分とし、時にはその船の貿易を禁ずるに至った。享保の『洋書の解禁』はこういう厳しい禁書令の一部を緩めたもので、その内容がキリスト教の布教などに直接関係ある本はもちろん許さないが、噂程度の文句が入っている本は一般に売買しても差支えないということになったのである。この令によって解除された従来の禁書は、寛永の32種のうち12種、貞享以降のものは7種に及ぶ。この令は公示されたものではないのでその後も徹底はしなかったようであるが、とにかくこれによって外国書籍輸入の途は大きくひらいたたのである\*。」<sup>(8)</sup> 佐藤昌介もこの禁書の緩和によって、農事に関係をもつ暦学研究のみならず、外来の諸科学研究が一段と進展をみたことはいうまでもあるまい、と

(6) 高橋碩一、前掲書、41－2ページ

(7) 佐藤昌介、前掲書、71ページ

(8) 辻達也『徳川吉宗』、吉川弘文館、1985年、173－4ページ

述べている<sup>(9)</sup>。

\*さらに辻達也によれば、「杉田玄白の『蘭学事始』に、鎖国以来通詞すら欧文の読み書きを厳禁されていたが、ここに至って通詞の願いにより横文字を学ぶことを許されたところがあるが、これが誤りであることはすでに明らかになっている」<sup>(10)</sup>と書いている。玄白のこの著作はいうまでもなく感銘ぶかい歴史的な好著であるが、かれが晩年に40数年前の訳業を回顧して書いているその記述のなかには、誤聞、記憶違い、思い違いによる部分や、誇張などもまま散見され、書かれていることを必ずしもただちに史実とみなすことはできない、と今日みられていることに注意したい。長崎の通詞評などにもきびしすぎる箇所もあるようである。

吉宗が野呂元丈と青木昆陽にオランダ語の学習の内命をくだし、それ以来両人がこれを心掛けた、という玄白の記述は正しくないであろう。いずれにせよ元丈のオランダ語はごく弱かったと思われる。江戸でオランダ語の本格的な研究に着手したのは、青木昆陽であり、かれはむしろ自発的にその学習を志したのであり、長崎にも行ってはおらず、参府のオランダ人に就いて習得に努めた。かれには『和蘭文字略考』『和蘭語訳』などの著作がある。佐藤昌介も、「青木昆陽によって、江戸におけるオランダ語学習の緒が開かれたことは疑いない事実である。なお、昆陽の蘭語研究が、のちに前野良沢らに継承されて、『解体新書』の成立となることは、あらためて、述べるまでもなるまい」<sup>(11)</sup>と書いている。

**諸学の興隆と蘭学** いわゆる「鎖国」令の実施は、日本文化が国際的に広く開かれた状態で展開する道を閉ざしたが、幕府が国内の諸問題に専念することによって安定した封建体制を仕上げるのに大いに役立った。その功罪如何には複雑なものがある。ともあれやがて元禄時代

(広義)を迎え、文化は内的醗酵をとげ、文学、芸能、絵画、工芸はもとより、語学もまためざましい発展・興隆をみることとなった。そして十代將軍家治の明和4年(1767年)から天明6年(1786年)にかけていわゆる田沼時代の只中、すなわちほぼ70年代前半に蘭学が誕生するのである。

次に、蘭学誕生のための前提ないし条件となる他の諸学、特に儒学と国学の興隆、および古医方派の活動について、要点をみておこう。

(1) **儒学の興隆** 朱子学派の木下順庵門の活況は林家を凌ぐほどの勢いとなり、その寛容の精神と実証的・合理的精神は、門人たちをとおして全国に広がった。また、貝原益軒は西国・筑前を主たる活動の地としたが、かれには道学的側面とともに実証的・経験主義的な側面があり、本草学の研究にとりくみ、すぐれた生物誌『大和本草』を刊行した。かれはまた宮崎安貞、中村惕斎、向井元丈、稻生若水、松岡恕庵らの著名な諸学者と交流し、植物採集や実験的な栽培を共にするなど、共同して実証的な研究をおこなった<sup>(12)</sup>。このようにして、儒学の例からみれば、その窮理の精神が江戸期の学問研究にしだいに広く滲透してゆくのである。高橋碩一も、当時における洋学を迎え入れる思想的準備として、「この窮理の精神が、なんらかの形で西洋近代学術の実証主義的傾向を迎えるに当って素地を提供したということが考えられる」<sup>(13)</sup>と述べている。

儒学内部で17世紀後半から山鹿素行、伊藤仁斎、同東涯、荻生徂来、太宰春台らによる古学の運動がおこり、盛になったのは、周知のとおりである。それは、朱子学や陽明学など宋明の

(9) 佐藤昌介、前掲書、73ページ

(10) 辻達也、前掲書、173ページ

(11) 佐藤昌介、前掲書、74、75ページ

(12) これらの諸学者の研究については、手短かには、木村陽二郎、前掲書によって知ることができる。

(13) 高橋碩一、前掲書、49ページ



儒学への疑問から、それに反対して、直接に古代の經典にたちかえって聖人の真意を明らかにしようと唱えるものであった。徂来は、朱子学の原理をなす<sup>天人一理</sup>「天と人、自然と人間のあいだに一つの理がつらぬく」の思想をうちやぶって、中国最古の古典（六經）に説かれるところの「先王の道」をば、安民のために先王のたてた作為としてとらえ、これを天地自然の領域から切り離した。この「先王の道」を明らかにすることを古文辞学の課題とした。そして、このことによって、結果として、かれは、他の人々が自然研究を独自に実証的にすすめる道を用意したといえるのである。徂来は、経験的な知識領域の漸次的な拡大を当然にも認めており、「学問は只広く何をもちをも取り入置て、己が知見を広むる事にて御座候」<sup>(14)</sup>と、広きを求める視点を勧めている。

高橋碩一は「儒教内部の〔このような〕自己反省に見出されえた実験主義経験論ないしは合理主義は、後に西洋科学思想の影響を受けて、かの山片鰭桃のごとき世界観にも達したのであるが、かかる新しい世界観を構成することは、すなわち儒教自身の止揚、儒教的觀念の敗退を意味するものである」<sup>(15)</sup>として、「洋学の移入のもたらす新しい世界観形成のもつ意味をこのような面からとらえることの必要性を指摘している。儒学の家窮理<sup>かきうり</sup>の精神は、紆余曲折してついに近代科学にいたる道をしだいにひらくのであるが、それには、儒学の天人一理、易学的陰陽五行説の長期にわたる漸次的な止揚を必要とした。そしてそれへの画期的な出発点をまずもって具体的に示したのが、『解体新書』の訳業であったということができよう\*。

\* 昆陽の弟子で長崎にも学んだ前野良沢（1723—1803年）は、後述するように、この翻訳グループの盟主とされた。かれの「<sup>かんぎひ</sup>管蠡秘言」（1777年）は、西洋の自然科学——かれの言葉によれば「四元」説と「三才〔天・地・人〕常變の理」を——概説した論稿である。もっとも、かれはなお天動説をとっている（むろん地について「その形は円にして玉の如し。故に地球と称す」<sup>(16)</sup>とする）。ところで、わたくしがここでこの論稿に言及するのは、かれが、西洋で長くとられてきたアリストテレス＝トマス・アクィナスの系譜の四元説（ただし、そこでの氣をここでは空といっている）と、中国・日本の伝統的な五行説との間にみられる根本的な相違を指摘し、西川如見の両者一致説などに強く反対しているからである。すなわち、「<sup>たい</sup>天五行ノ説ハ、僅ニ支那一区ノ私言〔支那という一地域だけにおこなわれている主張〕ニシテ、四元ノ渾天渾地ノ公言〔アリストテレス以来の宇宙に通ずる正当な主張〕ニ異ナリ。」なぜかといえば、五行説の唱える五元は、もとはといえば「<sup>ふ</sup>夫レ水火木金土ハ、本来、水火木金土ナル而已〔あくまで物質の要素にすぎない〕。然ルニ天地間無数の事物ヲ強ヒ調ヘテ、悉クコレニ配当ス〔万物を分類して恣意的に五元に割り当てる〕。所謂陰陽五行、コレヲ<sup>かた</sup>数テ、百ナルベク、千ナルベク、<sup>ひと</sup>只人ノ言フ所ノ隨ナリ〔いくらでもその数は勝手に多くしうる〕。豈ソレ本然〔万物の固有の理〕ヲ得ンヤ。たとえば、「若シ夫レ智仁ハ人ノ徳ナリ。コレヲ五行ニ配スルハ如何〔人間の徳を物質の根本要素に配当するなどは、とんでもない脊理ではないか〕」<sup>(17)</sup>。この見地から漢方医学をもかれは批判している、「〔漢方では〕心肺〔心臓や肺臓が〕本然〔ほんらい〕何物タルコトヲ知ラザルヲ意トセズ。泛ニ火トイヒ金トイヒテ、コレヲ治論〔治療の論〕ノ口実トス。夫虚説ナルモノヲ以テ口言ノ証実〔口先だけの証拠〕トス。コレヲ言モノモ知ラズ、コレヲ聞クモノモ知ラズ。殆<sup>およ</sup>哉、一盲衆盲ヲ引ク〔一人の盲人が多くの盲人を率いてゐる〕、其坎險〔危険〕ニ陥ザルハ幾<sup>いふ</sup>ト幸也。比類挙テ計フベカラズ。本然〔ほんらい〕水火木金土ニ非ルモノヲ、強テ水火木金土トナス。巧言流弁〔巧みにいひ、流暢に弁じてゐて〕、談ズベク聞クベシトイヘドモ、悉ク皆嘘言ナルヲ如何。夫他邦〔オランダ〕ニ在テハ、智仁・東西・人性・五蔵等ヲ水火木金土トハイフベカラズ。予、五行ハ一区ノ私言ナリト云ハ、コレガ為ノ故ナリ。和蘭、地水火空ヲ云ハ、直ニ地水火空ナリ〔ほかでもない、万物の構成要素としての四元である〕。コレヲ学バ

(14) 荻生徂来「答申書」、荻生徂来全集第一巻、みすず書房、1973年、436ページ

(15) 高橋碩一、前掲書、51ページ

(16) 前野良沢「管蠡秘言」、前掲『洋学』上、129、132ページ

(17) 同上書、135ページ

ザル他邦ノ人モ、地水火空ヲバ、即チ地水火空ト云。コレ渾天渾地ノ公言〔宇宙に通ずる正当な主張〕ニアラズヤ。支那五行ノ説ヲ混雜シテ〔ごたまぜにして〕、コレ〔四元の説〕ヲ粉々タラシムルコトナカレ。〕<sup>(18)</sup>

ニュートンの力学を叙述し、ケプラーの法則を導入して地動説を説き、カント＝ラプラスの星雲説に比しうる「混沌分判図説」を提唱したことで知られる志筑忠雄の『暦象新書』（1798－1802年）ですら陰陽五行説とある妥協を試みていることをみれば、その説の止揚の道がじっさい日本で紆余曲折したものであったことが知られ、やはりまた、佐藤昌介も指摘するように、長崎通詞たちよりも『解体新書』のグループの方が、このかぎりでは方法論的にすすんでいたとみななければならないであろう<sup>(19)</sup>。良沢の述べた五行説へのこのような批判は、『解体新書』仲間、その中心メンバーのあいだに共有にもたれていたであろうと思われる。玄白はたとえば、自分の影法師との対談である『形影夜話』（1802年筆）で陰陽五行説を「妄説」といいきっている。そして、後藤良山、香川修徳、山脇東洋、吉益東洞ら古医方の医者たちが陰陽五行の妄説を看破したのは卓見であったとする。しかし、かれらには当時実証的な研究をすすめるための手掛りがまだ備わっておらず、その機熟さず、かれらはオランダの解剖学を積極的に拠点とするとともにまですることができなかった、とみる。そして東洞を惜しんで「近時の豪傑」（もちろん武勇によってではなく学問的な精神の力によって）であったという。「今時の如く、阿蘭の医理開けしを〔かれの〕在世に語り聞かせなば嘸や喜悅あるべきに、今は千古の人〔故人〕となられしは遺憾の事ならずや」<sup>(20)</sup>。東洞は『解体新書』刊行の一年前に世を去っている。わたくしは東洞にたいする玄白のこの深い敬慕と愛惜の思いとに感動する。ただ後に来る者は先立つ者の到達しえなかったことを、批判すればすむものではないのである。学問はこのようにしてひきつがれる。

もう一つ、従来から蘭学社中の者が学んだ重要なことは、医学のためにはその原理、すなわち医理を明らかにすることが第一であるという思想であった。そして、これは蘭学の誕生にとって根本的なことであったといえよう。玄白が「形影夜話」で述べているところによると、か

れが若い頃外科に志しながら、なにを目当てに努力すればよいか、またなにを力として事をはかるべきかが分からないでいたとき、はからずも従来の『鈴録外書』をみたところ、真の戦というものは、いまの軍学者流が軍理などを抜きにして教えているような戦のやり方とはちがって、軍理こそが戦の根本である、実際の戦のさいには、地形や気候、兵力、兵器などの装備といった具体的な諸条件が重要である。それゆえ、将たるものは軍理にもとづいてこれらの諸条件にそくする戦法を具体的にたてねばならぬ、と書いてある（「常に軍理を学び得て、大将の量〔力量〕に従い、勝敗は時に臨で定るものなり、と記し置給ひたり」）。「是を読んで初て発明する〔啓発される〕事あり。是実（これ）に然るべき事なるべし。我医〔われわれ医者〕も旧染〔古くからしみこんだ習い〕を洗ひ、面目を改めざれば、大業は立べからずと悟れり。かくありて後、初て真の医理は遠西阿蘭にあることを知りたり。夫（それ）医術の本源は、人身平素の〔正常の〕形体、内外の機会〔様子〕を精細に知り究るを以て、此道の要となす、とかの国に立ればなり。凡そ病を療するに、此に精しからざれば、決して的中の治療はならざるの理なり。」「医を学ぶ者、此事〔「形体内景の平素」、すなわち形体と内部構造の常態を、精究すること〕を第一とし、これを得て後、治療の道を知るといふを曉れり」<sup>(21)</sup>。もちろん、医学のためには、多くの治療の経験を積みねばならぬ、書物を広く多く読まねばならぬ。また、患者の具体的な病状を現象的に知らねばならぬ。医療という人間生死の重大事にかかわる以上、並大抵の努力ではたりない。しかし、まず根本的に旧来の医学のよう

(18) 同上書、137ページ

(19) 佐藤昌介「洋学の思想的特質と封建批判論・海防論」、前掲『洋学』上、630ページ

(20) 杉田玄白「形影夜話」、前掲『洋学』上、262、257ページ

(21) 同上書、257、263ページ

に、人体の内的構造を原理的ににも知らないですましては正しい処方に基づくことができるはずがない。医理に立ち戻ることを説いているオランダ（＝西洋）医学の優位を、玄白はこのように確認するのである。

さいごに、上述のこととの関連で、新井白石の業績について一言しておこう。周知のとおり、かれは朱子学者でありながら、つよい学問的意欲をもって斬新な視野を拡大することに努めた。佐藤昌介は、しかし、この点について、白石が朱子学的な思想の枠内にいるかぎり「洋学勃興の思想的前提を準備したとはいえない」と評している<sup>(22)</sup>。たしかに、前述した点で、蘭学誕生の前提をつくったものとして、従来の役割は大きい。この視点からみるかぎり、白石よりも従来のずっとすすんでいたとみることができるだろう。しかし、朱子学の枠は一朝一夕にはうち破れないのであり、白石が当時朱子学者として国際的視野をあとうかぎり広げ、西欧的知識の積極的な摂取に力を注いだことは、たとえ限界があるとはいえ、蘭学の導入に向かったの大きな一歩を開いたとはいえるであろう\*。大槻玄沢も蘭学を学び始めた頃に（1779年）、白石の『采覧異言』を熱心に筆写している。この著作は当時学問を志すものの必見の書であった<sup>(23)</sup>。わたくしは「思想的前提」の「準備」の意味を氏ほど厳密にはとらず、漸次的に形成される過程として、ここではみておきたい。

\* 蘭学者山村才助（1770－1807年）の代表的著作『訂正増訳采覧異言』（1802年）は、かれの広い世界地理学的な新知識をもって白石の著作を大きく発展させたものである。鮎沢信太郎も次のように書いている。「白石の世界地理学をのりこえたのは歴史の波であり、時勢であった。もっと具体的にいえば、江戸における蘭学の興隆であった。これをもっと重点的にいえば、専ら世界地理研究に任じた山村才助の

蘭学であった。」才助のこの著作は「これを量的にみると、白石の原著の約十倍の大きさがある。これを質的に見ると、やはり、はるかに白石の世界地理知識をこえて、十倍するものがある。その編目は全く白石の原著によって筆を進めたのにもかかわらず、全体的には、その量と質いずれの面からも、全く独自の著述の観がある。」<sup>(24)</sup> しかしこの著作は写本として伝わるにとどまった。この逸才は、このライフワークを仕上げて数年後38歳で夭逝した。

(2) 国学の興隆 元禄時代（広義）における諸学の興隆を考えれば、戸田茂睡、下河辺長流、僧契沖らによって、日本の古典の文献をじかに研究することによって上代の精神に迫ろうとする努力が始まり、国学興隆の道が大きく開かれたことを指摘しなければならない。国学の誕生と興隆については、拙稿「国学思想の成立と展開」——契沖・春満・眞淵について——（大阪経済法科大学編集、第53号 1993年10月）に詳説したので、ここでは略する。若いころオランダ語で書かれた新知識を翻訳によって日本に紹介することの重要さを、杉田玄白とつねづね語り合っていた才気煥発なかの平賀源内は、その主著『<sup>ひんしつ</sup>物類品隋』や『風流志道軒伝』を上梓した1763年、思うところがあって賀茂眞淵の門に入ってもいるのである。文化の多彩に高揚する時代の気運——そして諸学研鑽の絡み合い——をわれわれはここにも感じることができる。

(3) 古医方 鎌倉時代以降わが国でおこなわれていた、中国、金・元時代の張潔古、李東垣、朱丹溪らの系統をひく冥想的要素の多い医学派（後世方<sup>ごせいほう</sup>）に反対して、古代の張仲景（2世紀）の『傷寒論』のような著作にたちかえり経験と実証を重んじて診療に当らうとする医学の新しい傾向が、名古屋玄医（1628－96年）、後藤艮山（1659－1733年）によって唱えられ、山脇東洋（1705－62年）、吉益東洞（1702－73年）ら

(22) 佐藤昌介、前掲書、41ページ

(23) 鮎沢信太郎『山村才助』、吉川弘文館、1989年、139

ページ

(24) 同上書、142ページ



によってひきつがれた。後世方にたいするかれらのいわゆる古医方における新傾向は、儒学における古学派の勃興と思想的な連関をもっているといえよう。じっさい当時、儒者で医療をおこなう者が少くなかったということも、このことと結びついているだろう。

山脇東洋は1754年、京都で人体解剖の場に臨んだ(弟子小杉玄適も参加した)。これは、古医方の実証精神が「一つの頂点に達した」ものと高く評価されている<sup>(25)</sup>。この派の唱える「親験実試」の面白躍如たるものがある。これは、前野良沢・杉田玄白・中川淳庵が臨場した江戸、骨ヶ原での人体解剖に先立つこと十数年であり(22才の玄白はいま名をあげた小杉玄適からこの解剖の状況をきいている)、東洋は5年後に旧説の誤りを指摘して『臍志』を世に問うている。かれがそのさい西洋の解剖書(多分パドヴァ大学のヘスリンキスの解剖書のオランダ語訳であろうといわれる)を参照していることが注目される。かれの解剖の親験は、「もはや洋学の準備を出て、直接洋学勃興に影響を与えた」<sup>(26)</sup>と高橋嶺一も書いている。また、山脇東洋の弟子永富独嘯庵は病理解剖の必要性にも気付きこれを唱えた(「人病て死シ病原明カナラザレバ則チ之ヲ剖剥〔切り裂く〕シテ視ル、以テ後図〔後日のための計画〕ヲ爲ス」<sup>(27)</sup>)。かれ自身はこれを実施しなかったけれども、この提唱は、ヨーロッパで病理解剖学を樹立したモルガニーの主著出版(1761年)の3年前のことであるといわれる。

しかし、古医方は、なお、科学的な理論をなにももちえぬままに、「一気留滞」(艮山)や

「万病一毒」(東洞)などの主張にみられるような空疎な思弁にも陥っており、漢方にたいする思想的・原理的な批判を展開するにはいたらなかった。

以上(1)(2)(3)における考察からもわかるように、当時わが国は「鎖国」下ではあったが、長崎は、ともかく外国(西洋)への開かれた窓となっていたのであった。わたくしは本章ではさきに触れなかったが、長崎入津<sup>にゅうしん</sup>のオランダ船のカピタンは長崎奉行を通じ幕府に「阿蘭陀風説書」<sup>がき</sup>を提出し、海外情報(nieuws)を伝えた。文書での提出であれ、口頭の発言であれ、その翻訳に当たったのはもちろん和蘭通詞であった<sup>(28)</sup>。

本節では、蘭学誕生を準備したわが国の文化、とくに諸学展開の事情、その有様<sup>ありよう</sup>を主として考察したが、同時にぜひ考えておかなければならない重要な条件として、西欧諸列強が「鎖国」下の日本をそのいわば閉じられた情眠のうちにいたずらに長く放置しておかなかったということが指摘されねばならない。それら諸列強の経済的發展、すなわち海上交通・海外貿易と経営の進展は、しだいに日本列島の北、ついで東、また南西と、その海浜にひたひたと押し寄せてきていた。まずは18世紀後半にロシア船に乗ったロシア使節の来航があり、工藤兵助、林子平らは、いちはやく北方問題ととりくみ、警備と交易、あるいは海防の必要性を説いた。——以後、19世紀初頭から諸列強の接近がしだいに繁くなり、海外情報の獲得、海防対策などのため、わが国は、ますます眼を諸外国の動勢に向け、

(25) 小川鼎三、前掲書、106ページ

(26) 高橋嶺一、前掲書、56ページ

(27) 小川鼎三、前掲書、111ページより借用

(28) 板沢武雄、前掲書、178ページ以下を参照

(29) 「阿蘭陀風説書」とその意義についてわたくしは本書のなかで触れるいとまがない。板沢武雄、前掲書、「三 阿蘭陀風説書の研究」を参照されたい。

横文字の著作を研究する必要に否応なしに迫られることとなった。とくにアヘン戦争（1840—42年）の影響は大きく、海防のために外国の兵学、砲術を学ばなければならず、富国強兵への模索も始まり、こうして、蘭学はもはや、かつての蘭学社中の場合のように、藩医の身分とはいえかれら医者自身の学問的な発意から始まる自由な研究にはとどまりえず、しだいに幕府と諸藩が積極的にその導入に努めるところの体制的な学問ともなった。これはやむをえない歴史の推移といえよう。

## 2 蘭学の誕生、そして隆盛へ

オランダ流の外科医の家を継いだ杉田玄白（1733—1817年）は、『蘭学事始』のなかで若い時分に五歳ほど年長の平賀源内と次のような話を日頃交わしていたことを述懐している。「つねづね平賀源内などと出會ひし時に語り合ひしは、追々見聞するところ、和蘭実測窮理のことどもは驚き入りしことばかりなり、もし直にかの図書を和解し見るならば、格別の利益を得ることは必せり。されどもこれまでそこに志を發する人のなきは口惜しきことなり、なにとぞこの道を開くの道はあるまじきや、とても江戸などにては及ばぬことなり、長崎の通詞に託して讀み分けさせたまきことなり、一書にてもその業成らば大なる国益とも成るべしと、たゞその及びがたきを嘆息せしは、毎度のことなりき。然れども空しくこれを慨嘆するのみにてありぬ。」<sup>(30)</sup>

このような想いをかねがね抱いていた玄白の手中に、ある日二冊のオランダ語の医書が届いた。それは1771年（明和8年）の春である。同

じく若狭小浜藩の藩医である後輩の中川淳庵\*（1739—1786年）が、ひごろ出入りしているカピタンの宿舎、長崎屋で『ターヘル・アナトミア』と『カスバリュス・アナトミア』\*\* という身体内景（内部構造）図説の書物二本をオランダ人に示され、望む人があれば譲る、といわれた。そのことをきいた玄白は、一字も読めない身であったが、内臓の図にしても骨格の図にしても、これまで見聞きしていたのとはまるで違ったものであり、ぜひ入手しておきたいと思い、崎門学派の学者である藩の長老にたのみ、殿様から金を出してもらうことができた\*\*\*。

\* 中川淳庵は、『蘭学事始』のなかで玄白がしばしば言及している、年下の親愛な学友である。若くして医学、本草学を学び、博学多才、『解体新書』の翻訳はもちろんのこと、玄白に協力して、蘭学の発達に寄与するところが大きかった。来日したツンベリーも淳庵が学才に富みオランダ語をよく話すことを伝えている。惜しむらくは48歳で没した。

\*\* 『ターヘル・アナトミア』と呼ばれる書物のオランダ語原名は“Ontleedkindige Tafeln”（『解剖学表』）といい、これはドイツのダンチヒの解剖学教授クルムスの著述のオランダ語訳である。『ターヘル・アナトミア』という呼び名は、書物の絵屏にある複数形のラテン語 Tabulae Anatomicae が単数形では Tabula Anatomica なので、これが崩れて生じたとされる。『カスバリュス・アナトミア』は、デンマークのカスパルス・バルトリヌスの著作“Anatomia Nova”（『新解剖学』）のわが国での呼称となった。

\*\*\* 玄白は、これよりさき1769年、出府した吉雄幸作に会い医術を学んださい、かれの示すヘイステルの外科治療の書を借り、掲載されている図が和漢の書と大いに異なり、しかも精妙にできていて、見ているだけで眼の前が開けるような気がして、幸作の在府中に全部写しとった経験がある。

ところが、その矢先、玄白は、江戸・千住の骨ヶ原で腑分け（人体解剖）があるという知らせを受けた。じつは、かれは、前述したように、十数年前まだ22才の頃に、山脇東洋が解剖を実

(30) 『蘭学事始』前掲書、25ページ

見たさいの状況を聞き、また東洋の著作『臓志』(1759年刊)を手になっている。それだけに、腑分けの知らせを受けたときのかれの喜びは大きく、『蘭学事始』に次のように書いている。「翁〔玄白晩年の自称〕、その書〔『臓志』]をも見し上のことなれば、よき折あらば翁も自ら観臓してよと思ひ居たりし。この時和蘭解剖の書も初めて手に入りしことなれば、照らし観て何れかその実否を〔旧来の漢説の図と新しいオランダ医学の図とのどちらが正しいか〕を試むべしと喜び、一かたならぬ幸の時至れりと彼処へ罷る心にて殊に飛揚せり」。しかし、こういう幸わせは、独占すべきものではなく、研究に熱心な同志とともに、「同じく視て業事〔仕事〕の益には相互になしたきものと思ひ量りて」<sup>(31)</sup>、中川淳庵や、年長の前野良沢(1723-1803年)らに知らせた——良沢といえば、16年前に、玄白は、これから長崎屋に赴こうとするかれにたのんで自分を同行してもらい、大通詞西善三郎に会う機会を得、西から江戸でオランダ語を学ぶことの難事をきいて、それを断念したことがある——。翌朝、かれらは浅草の某茶屋で落合った。そのとき良沢は一冊の蘭書を懐中から出して示し、「これはこれターヘル・アナトミアといふ和蘭解剖の書なり。先年長崎へ行きたりし時求め得て帰り、家蔵せしものなり」<sup>(32)</sup>という。見ると、これは玄白がもっていたのと同書同版であった。こうしてかれらは骨ケ原に赴いて、腑分けの現場で、身体の内景すなわち内部構造を、携えていった和蘭図と逐一照らし合わせてみると、まさにその図の示すとおりで、旧説とは違うことが明らかであった。

帰路、良沢、玄白、淳庵の三人が、道々話合ったことには、「さてさて今日の実験、一々

驚き入る。且つこれまで心付かざるは恥づべきことなり。苟くも医の業を以て互ひに主君主君に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形体の眞形をも知らず、今まで一日一日とこの業を勤め来りしは面目もなき次第なり。なにとぞ、この実験に本づき、大凡にも身体の眞理を辨へて医をなさば、この業を以て天地間に身を立つるの申訳もあるべし。」<sup>(33)</sup> このように語り合って嘆息した。そこで、玄白が、なんとかこの『ターヘル・アナトミア』の一冊でもあらたに翻訳すれば、身体の内外のことが明らかに、今日の治療のうえで大きな益があるにちがいない、何とかして通詞らの手を借りないで自分らで読み分けたいものだ、といったところ、良沢は、これに賛成して、自分のかねがねオランダの書物を読みはじめたいと念願していたが、同じ志をもつ友人がいなかった、もし皆さんがやろうとおっしゃれば、自分は昨年長崎にも行ってオランダ語を少々は覚えているので、これを元手にして読みはじめよう、といった。かれらはそこで早速、翌日良沢宅に集まって仕事にとりかかる相談をすることにきめた。

こうしていよいよ『ターヘル・アナトミア』にたち向かってみると、——玄白自身の回想の言葉を借りると——「誠に艱難なき船の大海に乗り出せしが如く、茫洋として寄るべきかたなく、たゞあきれにあきれて居たるまでなり。」さもありなん、なにしろ、玄白が自分で書いているように、「翁は、いまだ25字〔アルファベット〕さへ習はず、不意に思い立ちしこと」といった次第である。もっとも良沢は、四十をすぎたからであるが青木昆陽に就いてその『和蘭文字略号』などを読み、長崎まで行って吉雄幸作らの通詞からオランダ語の多くの単語や言語表現

(31) 同上書、26ページ

(32) 同上書、27ページ

(33) 同上書、29-30ページ

についても学んできている。当時はもちろん、日本語のオランダ辞典や文法書があるわけではなかったが、良沢は長崎からマーリンの辞書をもってきていた。かれは、玄白らにとってオランダ語を理解する年上の先輩であったから、研究会の盟主とし先生と仰いで、仕事にとりかかることになった。

研究会にはしだいに同好の士も集まってきたが、めいめいの志すところは様ではなかった。そのなかで玄白は、この訳業にみずからの託したところを次のように述べている。「翁は一たびかの国解剖の書を得、直に実験し、東西千古の差へある〔東西の説にはたいへんな違ひがある〕ことを知りしに驚き心服し、なにとぞこの一事早く知り明らめ、治療の実用にも立て、世の医家の業にも、発明ある種〔新しい考えを工夫するも〕にもなしたく、一日もはやくこの一部を用立つやうになし見たしと志をおこせしことゆゑ、他に望むところもなく」<sup>(34)</sup>云々。玄白がこの仕事に着手したときには、前述したように、かれの語学力はゼロといってよい状態であったが、医者として、人間の身体の内部構造がそもそものようであるかを原理的に知って、それにもとづいて治療という実用に向かうのであればならぬという、ただ一筋の目的をめざして刻苦勉強、本文の章句、さらに一つひとつの語句の解説には、昼には会合して玄沢を中心に検討を重ね、夜、宿に帰っては玄白が直ちに訳文の作成のために力を注いだ。「世医〔世の医者たち〕の爲に翻訳の業を首唱」<sup>(35)</sup>したからには、研究会でただ読み合わせをしたということではすなまいからである。それゆゑ、具体的な訳文の仕上げがどうしても必要であり、その仕事には、このようにかれ自身が率先して当たっ

た。その努力の跡をかれは次のように書いている。「一日会して解するところはその夜翻訳して草稿を立て、それにつきてはその訳述の仕かたを種々様々に考へ直せしこと、〔足かけ〕四年の間、草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すやうになり、遂に解体新書翻訳の業成就したり」<sup>(36)</sup>と。かなりのスピードである。玄白は厳密な訳を作るよりも、だいたいの道筋を示して世の医者たちの役に立てたいと思い、かなり訳業の仕上げを急いだ、ということもある。ここに良沢と玄白との違いがあったかもしれない。というよりかむしろ、このような訳業成就のためには、一方で、良沢のような、オランダの物事が好きでたまらず、それだけに急がずに正確にしらべることをおそらく無上の楽しみとし（ひとりで合点してうなずくところもあり）、高年みずから「蘭化」と称し（この名は君侯からかつて「和蘭人の化物」とたわむれにいわれたことに発するとか）、世の浮華はもちろんのこと、どんな野心にも超然とした奇異の才をもつ人物が会の盟主としてつねに座に着くとともに、他方、玄白のような、素意に発して小事にこだわらず大局をとらえて、できるだけ早急の成果をあげることを期して努力を重ねる人物の存在することが必要であつただろう。玄白は書く、「浮華の輩、雷同して従事せしも多かれども、創業の迂遠なるに倦みて廃するもの少からざりしに」——思うにこれが世の常であらう——、「この〔良沢〕先生、生涯一日のごとく、確乎として動かざりしゆゑ、その中には〔仲間のうちには〕、〔先生がをればこそ〕今の如くその業を遂げしもあることと思はるゝなり。これ全くこのこと〔この業、この学の〕開くるの時に遭ひし〔まさに時期にめぐりあつた〕ゆゑに

(34) 同上書、35ページ

(35) 同上書、42ページ

(36) 同上書、35ページ

や。』<sup>(37)</sup> また、後輩の藩医で本草に精しく和蘭物産の学にも志のある聡明多才な、中川淳庵が傍に坐し、また、医家の名門の出で若輩とはいえ逸群の才をもつ桂川甫周らが坐することも、玄白を支えたことであろう。仕事の終わりの頃にはさらに石川玄常が参画した。その他、高崎藩医<sup>みねしんたい</sup>嶺春泰、庄内藩医烏山松円、津軽藩医桐山正哲らがかれらの周囲をかこんでいた<sup>(38) (39)</sup>。『解体新書』の解体図は、秋田蘭画の小田野直武が描いた。それには平賀源内の斡旋があったものと思われる。

玄白は『解体新書』の出版（1774年、安永三年）にさいしいろいろと配慮するところがあった。一つは、この新刊に接して、従来の漢説に固執する人は、記述の精粗も分からぬままに、きっと、これは「胡説」だ、異端の説だといって騒ぎたて、手にとってみる人もいないだろうと思い、美濃紙わずか五枚刷りの『解体約図』を事前にいわば予告のちらしとして刊行した（1773年）。もう一つかれが大いに気を配った問題は、じつは、本草家の後藤梨春が和蘭の事情について見聞を書き集めて小冊子『<sup>おらんだばなし</sup>紅毛談』を出版したところ（1765年）、アルファベットが載っていたためにお咎めをうけて絶版になった（絶版のこの理由については玄白の思いすごしであろうが）ことにかんがみ、『解体新書』

の出版のためには処罰を免れるためにあらかじめ何らか手を打っておく必要があるということであった。そこで、公儀へは、旧友桂川甫三（甫周の父）に謀って非公式に奉呈したほか、九条、近衛、広橋の三家や、田沼意次をはじめとする全老中にも人を介してぬかりなく献上した。そしていずれも嘉納された。これらは玄白の、仕事のための周到な側面を示している。

ところで、玄白は『蘭学事始』のなかで「和蘭書翻訳といふことは、古今になきところの最初なれば」云々とか、「とても〔ともかく蘭書翻訳は〕われより古をなす事なれば」云々と述べているが、前述したように、そうとはいえず、約1世紀前に通詞本木良意の『和蘭全軀内外分合図』が訳出されており、この遺稿は、たいへん遅れてようやく1772年（明和9年）、すなわち『解体新書』出版の2年前に世に出ている。なお、骨ヶ原腑分けの1年前に、河口信任は師とともに腑分けに臨み、1772年に『解屍論』を刊行している。またすでに1759年、東洋による『臓志』の刊行もある。それゆえ、少くも玄白の事業はけっしてたんに突発的な創業ではなく、時の気運のなかでおこなわれたものといえよう。玄白が訳業の仕上げを急いだのには、先駆けたいの思いもなにほどかあったことであろう。これにたいし、良沢は、一文、一語にこだわって

(37) 同上書、39ページ

(38) 板沢武雄は当時からが（とくに良沢を中心にして）もっていたオランダ語の学力について次のように書いている。「原書と訳文とを比較して考える時、なまやさしい苦心でできたものでないことを知ると共に、なまやさしい語学力のできる筈がないことを知るのである」（玄白が『事始』で書いている、フルヘッヘンドの訳語をきめるための苦労についての記述（同上書、32-33ページ）は、よく知られているが、そのような語は原書にはなく、必ずしも事実を伝えていないとのことである）。板沢はさらにいう、「彼〔青木昆陽〕の和蘭語学の長崎通詞よりの伝承であることは確かである。そして青木昆陽より前野良沢の承け継いだ和蘭語

の知識の量は『蘭学階梯』〔大槻玄沢の書、1781年成稿〕に伝えるより遙かに多かったことは明らかである。その上に良沢が長崎において学び得たところと、彼の研究工夫になったものを加えた時、解体新書翻訳時代の和蘭語学は相当根を張り枝を増したものであったことが考えられる」（板沢、前掲書、204、207ページ）。良沢の指導的な語学力なしには、この業は、かなり短い期間に成就することはできなかっただろう。

(39) 『解体新書』は、クルムスの『ターヘル・アナトミア』（日本での通称）の本文の翻訳では、その倍位の分量の注をすべて除いている。図版については、クルムスのほか11種の原書を参考に行っている。周到な用意がうかがわれる（板沢、前掲書による）。



意味や文法を調べることに楽しみを見出している。両者の対照も妙である。しかし何といっても、江戸で、昆陽の弟子である良沢を盟主とし和蘭医学の藩医らが中心となって、独力で、しかも、訳文をつくることの御本尊玄白が語学的にはゼロともいえる無理な状態から出発して、刻苦して仕事にとりくみ、同好の人々を集め—その過程には挫折あるいは離散する者もおったとはいえ—、ついに所期の目的を比較的短期日に達成したことは、特筆に値すると思う。こうして、かれらの社中からだれいうともなく「蘭学」という新しい学の名称が生まれたのである。これはじつに一つの大きな文化的な運動であったといえよう。よき意味での時運である。奥州一ノ関藩の侍医、建部清庵は遙かに玄白の名を伝え聞いて、条件に恵まれない僻地にありながら、オランダ医学への切実な関心からいくつもの<sup>がいせつ</sup>凱切な質問を綴った書簡をかれに発する。玄白はまた、躍る胸を抑えて返書を書く。斯学草創期を彩る感動的なかれらふたりの往復書簡（最初の1770年から73年までのもの）は、『和蘭医事問答』と題して杉田伯元によって杉田塾生のための斯学勉めの書としてやがて上梓された。かの大槻玄沢（1757-1827年）は、はじめ一ノ関でこの清庵に就いて学を学んでいたが、江戸に出て玄白の門に入り、さらに良沢を師としてオランダ語を修得した。かれは、宇田川玄随と並んで、次の世代の蘭学の代表的な学者となる。清庵の一子（由甫）は玄白の養嗣となり（いま述べた『和蘭医事問答』の編者、杉田伯元である）、他の一子（亮策）もまた玄白の門をくぐっ

ている。

なお、玄沢についていえば、江戸に出て学習に勵んだのち、西遊の機を得て長崎に至り、かの本木良永の家に寄宿して教えをうけ、また吉雄耕午（幸作）のもとへも出入した（1785-6年）。かつて稿を成していた『蘭学階梯』を、帰府してさらに加筆し、これを後来の者への好個の入門書として1788年に刊行した。これは、わが国でのオランダ語学習のための著作として、昆陽『和蘭文字略考』→良沢『和蘭訳筈』（刊行されず）→玄沢『蘭学階梯』という系譜をなす大きな成果である<sup>(40)</sup>。玄白は晩年『蘭学事始』を手録して高弟玄沢に贈り、ぜひその下書に手を入れ、<sup>せんしよ</sup>繕写して<sup>まごこ</sup>孫子にまで読ませることを依頼した。玄沢はそこで玄白に聞いたことや、玄白の思い出したことなどを書き加えて、上下二篇にまとめた。そして「蘭己に東せり」というべき斯学の起源をしるした書であるとして<sup>(41)</sup>、『蘭東事始』と題して玄白に進呈した。著作の標題については、写本にはほかになお『和蘭事始』ともあるが、本稿ではわたくしは、明治（福沢諭吉によるこの書物の出版、明治2年）以来現在まで広く用いられている『蘭学事始』を名称として用いることにした。この名称は、玄沢自身が、この著作の仕上げから年経ずしてものした『蘭訳梯航』で—もし後人の書き入れでないとすれば—、しばしば用いているところである。

玄白はなお『事始』のなかで、前野良沢、中川淳庵やかれ自身を中心として社中の者たちが創始した蘭学をうけついで、その後、さまざま

(40) オランダ文法の本格的研究を始めたのは、志筑忠雄とされる。かれは、オランダ人、池物蘭の文法書によりながら苦心して『和蘭詞品考』を書いた。かれの弟子、語学の逸才、馬場佐十郎は、某より借覧した写本『蘭語九品集』なるものが師の『詞品考』のひきうつ

しだったので、写誤を訂正して『訂正蘭語九品集』を公けにした（1813年、文化11年）。なお、蘭学の発達が、文法から出発していないことに注意したい。板沢、同上書、25、231、237ページを参照

(41) 注(2)を参照

な支派・分流が生まれたことを述べ、大槻玄沢はもちろんのこと、長崎の新井庄十郎、津山藩の藩医宇田川玄随、その養子となった宇田川玄眞、京都の小石元俊、大坂の橋本宗吉、土浦侯の藩士山村才助、長崎の通詞から白河侯松平定信の家臣となった石井恒右衛門、因幡侯の医師稲村三伯ら、他方また、オランダ通詞として西善三郎、本木良永、志筑忠雄、吉雄權之助、馬場佐十郎ら<sup>\*</sup>をあげ、とくに志筑忠雄については、「本邦和蘭通詞といへる名ありてより前後の一人〔後にも先にも一人しかいないほどの達人〕なるべし。若し此人〔通詞を〕退隠せずして、在職におらば、却<sup>かへ</sup>ってかくまでには至らざるべきか」<sup>(42)</sup>と書いている。

<sup>\*</sup>吉雄權之助や馬場佐十郎は、やがて、オランダ語のほかロシア語、英語、フランス語をも学んだ。

『蘭学事始』は、前述したように、玄白が、オランダ解剖学の新知識を、細部にとらわれず、その大綱、全体の道筋を世の医者たちになるべく早く示すことを何よりも肝要と考えてかれ自身文章化することによって仕上げたものであるが、そのためもあって誤訳も避けられず（良沢も、相談に乗ったであろうが、訳文の全部を厳密に検討したのではなかったと思われる）、その推敲・改訂を玄沢に託した。意をうけて玄沢は『重訂解体新書』をようやく師の没後1826年（文政9年）に出版することができた。訳文ははるかに正確となり、これは江戸時代に日本で作られた最高の解剖書といわれる。

『解体新書』の末尾近く、この仕事を思いってから半世紀近く経った時点での感慨をこめて、玄白は次のように書いている。「一滴の油これを広き池水の内に点ずれば散って満池<sup>まんち</sup>に及ぶとや。さあるが如く、その初め、前野良沢、中川淳庵、翁と三人申し合はせ、かりそめに思ひつきしこと、五十年に近き年月を経て、この学海<sup>が</sup>内に及び、そこかしこと四方に流布し、年毎<sup>としごと</sup>に訳説の書も出づるやうに聞けり」<sup>(43)</sup>。そもそも十八世紀の半ば近く青木昆陽が緒を開いた江戸でのオランダ語研究は、このようにして、長崎通詞を中心としておこなわれてきたオランダ語の通弁・訳出の業と合流して、わが国の蘭学＝洋学はここに一気にみごとに華ひらいたのである。

その後についていえば、語学的な著作としては、大槻玄沢の『蘭学階梯』および志筑忠雄＝馬場佐十郎の『訂正蘭語九品集』<sup>(44)</sup>と、稲村三伯の『ハルマ（波留間・法爾末）和解』とがとくに重要である。後者はハルマ出版社刊の蘭仏辞典をもとにして訳したもので、わが国で最初の蘭和辞典である<sup>(45)</sup>。大槻玄白の支援のもとに儒医石井恒右衛門・宇田川玄眞らの協力のもとに約六万二千語を含む大部のものが、1796年に三十部、世に出た。のち、その縮刷版が1810年に刊行された。さらにのち、オランダ商館長ゾーフが通詞らの協力によって仕上げた『ハルマ和解』（1833年に成り、安政年間に刊行）が「長崎ハルマ」と呼ばれる<sup>\*</sup>のにたいし、石井・宇田川による大部の辞典は「江戸ハルマ」と別称される<sup>(46)</sup>。

(42)『蘭学事始』前掲書、38ページ

(43)『蘭学事始』前掲書、58ページ

(44)注(40)を参照

(45)わが国ではじめてマーリンの辞典によって蘭日辞典の編纂を試みた者は、大通詞西善三郎といわれる。しかし、事成らずしてかれは没した。

(46)板沢武雄は前掲書の第四章「辞書および文法書の編纂と蘭学の発達」を次の言葉で結んでいる。「幕末に

至って辞書と文法書とが備わったのであって、そのことが蘭学の普及発達を促したことは事実であるが、蘭学自体の発達はむしろそれに先行していたのである。すなわち蘭学は必ずしも辞書や文法書が備わってから発達したのではなく、むしろ蘭学の発達の最後の段階において辞書や文法書が備わったといえることができる」(237ページ)

\*のちに緒方洪庵の適塾で塾生たちが「ズーフ部屋」で夜を徹して使った『ハルマ和解』は長崎ハルマである。今日、大阪中央区北浜のオフィス街の一角にある適塾の一室、夜も燈火の消えることもなかったその一室で、塾生たちが交代して使ったこのズーフの辞書が、展示されている。

諸学・諸思潮——自然科学から社会論（経世論・社会批判等）に及ぶ——が、蘭学者ないし蘭学に着目する人々のあいだに、このようにしてますます興隆した。これは後戻りすることなく、幕末から明治初年におけるヨーロッパ諸国の学問の積極的な導入につらなる。さきに挙げた人々の名が若干重複してまた出るかもしれないが、玄白に非常に近かった人々を除いて、斯学の興隆・発展を担った、あるいはそれに結びついた重立った人々を次に掲げよう。なお、重要な著作を書き添えてはいるが、これは、思いつくままにするしたのであり、網羅的なものではない。

#### (1) まず、自然科学関係、

宇田川玄随（『西説内科選要』）、同玄眞（『和蘭内景医範提綱』『遠西医方名物考』）、吉田長叔（『蘭薬鏡源』）、小関三英（『泰西内科集成』）、高野長英（『西説医原枢要』）、伊藤玄朴、緒方洪庵ら——医学、薬学など。

麻田剛立、志筑忠雄（『暦象新書』\*）、間重富、高橋至時（『ラランデ暦書管見』）、同景保\*\*——天文・暦学。

青地林宗、川本幸民、橋本宗吉ら——物理学。

伊藤圭介（『泰西本草名疏』）、宇田川榕庵（『植学啓原』『含密開宗』<sup>せいみ</sup>）ら——植物学、化学。  
伊能忠敬——測地学。

\* 志筑には、ほかに『鎖国論』と題する有名な著述がある。

\*\* 高橋景保は幕府天文方をつとめたが、シーボルトの帰国にさいし伊能忠敬の測量による日本地図を渡したことが発覚し、これがいわゆるシーボルト事件の因となった。

(2) 次に、経世論、文明論などに及ぶ。

平賀源内（『物類品隲』『根南志具佐』）、工藤平助（『赤蝦夷風流考』）、林子平（『海国兵談』『三国通覧図説』）、司馬江漢（『和蘭通舶』『春波樓筆記』）、本多利明（『経世秘策』『西域物語』）、山片幡桃（『夢の代』）、佐藤信淵<sup>のぶひろ</sup>（『経済要略』）、山村才助（『改訂増訳采覧異言』『西洋雜記』）、帆足万里、渡辺華山（『外国事情書』）、高野長英\*（『戊戌夢物語』）、佐久間象山ら。

\* 周知のように、華山、長英はいわゆる蛮社の獄に連坐した。

### 3 同時代にたいするリアルな視点

#### ——とくに玄白の場合について

玄白が『ターヘル・アナトミア』の翻訳事業をおしすすめるにあたってその根底に一貫してあったものは、医者<sup>いしや</sup>の勤めは、つきつめていえば、患者の病をよく医することにある、というまっとうな自覚であった。そして、尊敬する先輩である山脇東洋、吉益東洞らの残した実証医学の課題を抜本的に前進させるために、かれはついに仲間の者たちの協力をえて西洋医学の原理的導入という大事業にたち向かったのであった。ここに、かれのヒューマンイズムをみることができるだろう。

かの『解体新書』の出版は田沼時代（1767－86年）の只中の1774年であるが、かれは次にみるように、同時代社会についてきびしい見方をしている。これもヒューマンイズムからでてくるといえるだろう。たしかに『蘭学事始』の末尾でかれは「恐れ多くも、ことし文化12年乙亥<sup>きのとい</sup>は、二荒<sup>ふたらの</sup>の山の大御神<sup>おおみかみ</sup>〔家康公〕、二百とせの御神忌にあたらせ給ふ。この大御神の天下太平に一統し給ひし御恩沢、数ならぬ翁が輩まで〔わたくしごときものまでが〕加はり被<sup>こう</sup>むり奉り、く

まぐすみずみまで御徳の日の光照りそへ給ひしおん徳なり」<sup>(46)</sup> 云々と、徳川統治による太平の世に感謝を表明している。とはいえ、かれが同時代の治世と悲惨困窮の民情とを視るリアルな眼は、憂いにみちていて、かなりきびしいのである。

## 1. 「後見草」<sup>うしろみくさ</sup>

そのことをよく示すのに、まず「後見草」(1807年撰筆)がある。これは、玄白が鳴長明の『方丈記』を想起して、宝暦九年(1759年)、家重から家治への将軍代替わりの頃から、天明七年(1787年)、意次が罷免され家斉が将軍となって松平定信が老中第一の座に就く頃までの現実社会の実情とその統治の実相を、年を逐って綴ったものである。玄白が社会情報のキャッチを日頃から心掛け、しかも、たんに事件を羅列するのではなく、事柄を認識したうえでリアルな筆

致で描いているのがみてとれる。最近、田沼時代評価の呼び声がかかなり高い。たとえば、田沼について「もっとも進歩的な人物であった」等々、といわれる(大石慎三郎『大江戸史話』1992年など)。しかし、そのさい、その時代の幕藩側の弾圧、天災人災による民衆の窮乏、しばしば累々と横たわる民衆の死屍の惨状、さらにモラルの退廃などは、しばしば注目されていないようである(もちろん筆者がそのことを知っていないだろうという意味ではなく、大衆向けの書物でこの面を述べない、つまり結局、覆いかくしている点においてである)。もちろん、田沼時代のとくに経済政策の積極的意義を考えることも大切である\*が、その蔭で民衆の悲惨がじっさいにかばかりなものであったかも、また、文化の高揚・発展とともにモラルの荒廃がいかにすすんでいたかも、忘れてはならないことであろう<sup>(47)</sup>。この点でその同時代からの玄白の報告

(46)『蘭学事始』前掲書、60ページ

(47)牧野昇、会田雄二、大石慎三郎監修『大江戸万華鏡』(農文協、1991年)は、書名の示すように、内容豊富に飾られていて読みごたえのある著作ではあるが、江戸時代を「万華」として美化して映しだしたものである。この著作は、たしかに「江戸時代には士・農・工・商というきびしい身分秩序があり、さらにそれぞれの身分のなかに、たとえば武士なら大名・幕臣(大名などの家臣)、幕臣のなかにも旗本・御家人というような区別があったとし、この身分秩序をば、いうまでもなく「封建社会の身分的秩序としてとらえている」(412ページ、傍点筆者)。そしてまた、食糧危機による民衆の困窮や社会不安についても、龐大な著作のなかにごくまれには触れているものの、士農工商、さらにはその下層(えた・非人)という身分的・階級的差別の実態についての言及を欠き、あるいは避け、江戸その他の地域での庶民の生活、農民の困窮——おそらく、大多数のものがしばしば物見遊山して浮かれていられるほど甘いものではなかったであろうと思われる——、あるいは幕藩権力による一揆への弾圧などには、ほとんどスポットをあてていないのである。それをいえば、華の鏡ではなくなるだろう。そもそも江戸期の安定、その「平和」と「繁栄」は、キリシタンへの悲惨きまる弾圧のうえに、それを前提として、しかもあたか

もそれを触れてはならないタブーであるかのようにして、はじめて成立しているのに、この重要問題は、江戸期の謳歌のために、本書ではまったく切り捨てられているのである。たとえば、著作の冒頭、「平和と繁栄のユートピア到来!」という項には、次のように書かれている。『「今がみろく〔弥勒〕の世なるべし!』これは徳川家康が江戸に幕府を開き、江戸の建設がはじまってまもない時期の世相を記録した『慶長見聞集』(三浦浄心著[1614年])の冒頭の章「万民たのしみにあへる事」に出てくる言葉です。『みろくの世』とは、釈迦が亡くなって五十億七千万年ののち、弥勒菩薩がつぎの仏として現れて、この世を極楽にしてくださるという信仰による仏教のユートピアです。江戸時代の初期とは、まさにそのような時代でした。」しかし、とくに華だけをえらんで鏡に映したとするのではないかぎり、これははなはだしい歴史の歪曲ではないか。豊臣方の家臣の家族の悲惨な生活もあったのである。つづいて、「日本の人口は戦国時代末期の一千万人台から、わずか百年後の元禄年間(1668-1704年)までに約三千万人へと、じつに三倍に増えています。そして江戸こそは、その平和と繁栄の時代の中心となつて、まさに『万民たのしみにあへる』花の大江戸となつたのです」(10-11ページ)とある。かりに今日、すなわち20世紀の50年代半頃以来の高度成長から世紀末ま

(いやむしろ告発とさえもいえよう) は重要な記録といえる。ここには玄白の時代にたいする姿勢、そして思想をみてとることができる。『日本の名著』22における榎林忠男による現代語訳を利用して以下その大意を述べよう(ただし、玄白の、聞き伝えによる記述も多いであろうし、一つひとつの事としては誤伝もあろう)。

\*かれはわが国で消費税を庶民に課した最初の人物であるとのことである。この政策は失敗した。

\* \*ややおくれて本居宣長も、『秘本玉くしげ』(天明七年、すなわち1787年、成る)や当時の日記のなかで天明期の世の困窮について述べている。「近來百姓は、殊に困窮の甚しき者のみ多し。これに二つの故あり。一つには地頭の年貢甚多きが故也、二つには世上一同の害につれて、百姓もおのづから十分のおごりもつきたる故也」等々(『秘本玉くしげ』本居宣長全集第8巻、筑摩書房、1972年、338ページ)。

宝暦から明和にかけては、江戸の火災、とくに放火、朝鮮使の刺殺に始まり、百姓騒動、討幕計画(山県大弼ら)の告訴と断罪があり、また、かの振袖火事(明暦の大火)以来の、放火による江戸を席捲する明和の大火、暴風雨の襲来、おかげ参りの流行と、不穏の事態がつづく。なかでも大弼の件について玄白はこう書いている。「はっきりした証拠はなかったが、時代をそしり、將軍を侮辱したという理由で〔そうとすれば冤罪かもしれない〕、大弼は首をはねられ、右門は鈴が森で獄門にかけられた」(傍点筆者、以下同じ。)また、明和の大火のひきお

こした修羅の巷については次のように書いている。「死体は、男女の見分けもつかないほどにこげただれていた。息たえだえに生きている者もいた。……ある者は堀や川に身を沈め、また大名の屋敷の中で、焼けこげて死んだものなどがあり、その他はかり知れないほどだった。また、かろうじて命の助かった人々も、父に死なれ、母と別れ、嬰兒を失い、妻と離れ、たがいに相手を求めて、あっちこちで泣き叫んでいた。……家を失った人々は、露にうたれ、舟に浮かび、行くあてもなく、途方にくれ、その人数はどれほどあるか知れなかった\*<sup>(48)</sup>。」

\*わたくしが三歳のときにおこり今も心の片隅にのこる関東大震災、1945年3月10日米軍B29による東京大空襲その他による惨禍がそうであったし、また1995年の阪神大震災のさいもそのようであった。また広島・長崎の原子爆弾による被災は、質的にはるかにすさまじいもの、地上における無幸の者の苛まれる地獄図そのものであった。

年号が安永に替わっては、疫病の大流行、大寒波の襲来、飛騨の国の百姓の強訴とその弾圧、疱瘡の流行、伊豆大島の噴火、関東の大洪水などがある。なかんずく飛騨の国の百姓一揆のさいには、幕命のもとに動いた美濃・越中の軍勢の強暴な振舞は、目に余るものがある。「なかでも〔美濃の〕郡上殿の軍勢は一番に馳せつけられ、とある森の片蔭で徒党の者たちが集まって朝食をとっていたところへ、鉄砲の筒先をそろえ、こっぴど微塵になれとばかり、打ちこまれ

でにいたる日本の姿を、その偽の「平和」と、上っ面な「繁栄」を、二、三百年もの後世の人々からこのように描きだされるとしたら、何という歴史の贗造になることであろうか。†拙稿「現代日本の思想状況について」『経済』第2号、1995年11月、174-5ページを参照。

なお、ついでにいえば江戸時代にはすでに近代があった、また「ルネサンス」(13世紀末から15世紀末にかけてのヨーロッパでの文芸復興)に類するものがすでにあった、という見地も、最近提起されている。しかし、もしそこにルネサンスなり近代なりをみようとする

るのであるならば、——思想の面でいえば——いかに人間的自我と自由(解放)の自覚が当時あったかが問われねばならぬだろう。しかし、江戸時代の全体にしる、なかでも、元禄時代、田沼時代、あるいは文化・文政時代にしろ、とくにルネサンスと同類の文化の高揚をみるのは無理であり、同様にまた、近代的な精神の高揚がすでにあったとみるのも、無理であろう、と思われる。

(48) 玄白「後見草」、前掲、日本の名著22、榎林忠雄訳、213、217ページ



た。この勢いに胆をつぶした徒党の者たちは、急に騒ぎ立ち、たがいに押し合ったり踏み倒したり、右往左往しながら逃げ散った。そしてたちまちのうちに、この騒動も鎮圧されたのである。しかし、またこの騒ぎで、深手を負ったり浅手を負ったり、あるいは即座に死んだ者も多かったと聞いている。江戸幕府が開かれて以来、鉄砲をつかって百姓を殺したことは、これがはじめてだということだった<sup>(49)</sup>。」これはじつに『解体新書』刊行の翌年のことである。玄白は、日本の医学の大きな変革に心を砕きながら、同時に社会の事態をじっとみつめ、つよい抗議の思いをこめてこの文章を綴っているのである。

ついで天明になっては、上野国の打壊し、大地震、浅間山の噴火と焦熱地獄、うちつづく大飢饉、頻発する百姓一揆と、玄白の筆はとどまるところがない。なんとしてでも一揆を圧さえようとする家老たちは、一揆の者が、もし説得を聞きいれないならば、「一人ずつひっ捕え、またそれも手に余るようだったら、皆殺しにしてもよい」と指令を出したとのこと、家来のある者には弓・鉄砲、ある者には槍・長刀とそれぞれに武装させて民衆の来襲に備えさせた。「これと真正面に立ち向かった一揆勢は、このようなまともな武士にかかっては、どうして勝目などあろう、ある者は腕・首を打ち落とされて横むけに倒れ、またある者は頭を打ち割られ、目玉が飛び出て死んだりした。その他、深手を負ったり、浅手をうけたりで、もはやかなわないと思って逃げ出す者を、若者たちはすかさず捕らえて縄をかけ、また押さえつけて旗を奪いとったりした<sup>(50)</sup>。」これではまさに戦争、いや支配者による被支配者の一方的な暴力的圧殺である。こうして、死傷者や、捕らえられて牢屋

にぶちこまれる者の数は多数をかぞえ、かれらの背後には、夥しい数の、働き手を失った老いたる者、また涙に濡れる力弱き妻たちの悲惨な生活があったのである。

天明になってからうちつづく大飢饉による米価の暴騰は庶民の生活をめちゃくちゃにうちめした。とはいえ、「江戸は、〔支配者たる〕將軍家のおられる所であるから、諸国から運でくる米穀などは絶える間がなかった」と、封建的搾取体制の実態を玄白は暴く。しかし、江戸でも、富裕で家が栄えている上層商人でさえもついに困窮する状態になった。玄白は書く、「江戸に住みなれた人々でさえ、このような状態だったから、ましてや遠い国、他の国からやってきた飢民たちは、どうすることもできず、大道にさまよっていたのである。町外れの辻々や小路に、行き倒れて死んだ者たちの数は、時の奉行所に届けられたものだけでも、一万人に近かったといわれている<sup>(51)</sup>。」江戸がこうした状態にあったとき、意次の子、若年寄の意知が殿中で刺殺される事件がおきた（1783年）。

ここで玄白は、筆を翻して、田沼意次の「御威光」と、そのもとでひたすら御機嫌をうかがい贅をこらして賄賂を贈る人々の姿を描く。「金銀や珠玉はもちろんのこと、ありとあらゆる外国製の宝物まで、この家に集まらないものはなかった」と。これにたいし民衆がいかに田沼父子を悪罵し呪っていたか。そしてついには意知の刺殺者が「世直し大明神」としてあがめられもする仕末となった。また、つづく飢饉の惨状、そして疫病も重なって死に絶えた村々、夜盗の横行、頻々と燃えあがる火事、河川の氾濫、江戸・山の手までも襲う大洪水（そのさいには「一日二日の野菜でさえも、買い求めるべ

(49) 同上書、222ページ

(50) 同上書、236ページ

(51) 同上書、237ページ

きところもなく、どこまでも人々の困窮はつづいていた<sup>(52)</sup>。そして將軍家治が重病に陥るなか、武士や庶民の不満の高まりをうけて意次は突如罷免されたのである（1786年）。

ここで玄白は、意次の権力と華美な生活のもとで、かれに縁のある家老たちがいかに贅を凝らした生活をしてきたか、また官位の売買さえもおこなわれていたこと等々をしるし、じつに宝暦の末年から天明の半頃にかけて二十数年間世の混迷と奢侈がますます度をこしていったさまをみている。また、人道もいちじるしく頹廢し、遊女屋どころではなく、怪しげな小屋では売春が流行し、浮世絵師の手になる猥画（今日でいえば、さしずめその道の「巨匠」によるいかわしいヌード写真であろう）、あたり憚る気配とてない大びらな博奕、巾着切の横行なども、枚挙にいとまがない。このようにして『後見草』は、將軍家齊を迎え松平定信が老中になるところで終わっている。

以上から、玄白の、同時代の統治と世相の推移をみる眼はかなり批判的できびしく、庶民のいのちとくらしを大切にす視点を基礎にしていることがうかがえるだろう——もっとも、かれはそこからさらにすすんで、かれらのいのちとくらしを守るためのたたかいには考えいたらないけれども。

ところで、前述したように、宝暦の半ばすぎから明和、安永、天明にかけてのこの時期——このいわゆる「田沼時代」はその時期の主要な部分を占めるが——の意義を、あたかも現代日本の括弧づきの「繁栄」の状況（たとえばマル

チメディア、インターネットの広汎な普及にも及ぶ）と重ねあわせるかのように、見直そうという傾向が、今日生まれている。ブームとなってきたといえよう。もちろんなにごとにせよ積極的意義を新たに発見してこれを語ることは異論のあるはずもないが、さきにも一言したように、そのさい従来指摘されてきた側面の理由なき切り捨てが見立つとすれば、これには同意できない。とくに田沼時代を現代と二重写しにして、その商業経済の繁栄と、あわせて文化のいちじるしい高揚を一面的にかなり手放しに重視する視点は、多かれ少かれ、今日の日本を表見的な「繁栄」「豊かさ」の面から美化してとらえる視点と結びついていることに留意したい。やはりここで、かの同時代者玄白の次の批判的な叙述をかみしめておくことも無駄ではないだろう。「およそ江戸時代が開かれて以来、人の上に立つべき人々の鄙夫下郎<sup>ひふげろう</sup>がやる以上の非法狼藉<sup>ひはふろうしやく</sup>ぶりは、まったく前代未聞のものである。これはまさに、人妖〔荀子もいう悪政の結果としておこる変事<sup>(53)</sup>〕ともいうべきものだろう<sup>(54)</sup>。」現代日本における経済・政治・文化にわたる支配層のあいだにも、かなり顕著に、同様の傾向がみられるように思われる。とにかく幕藩体制の支配層のあいだに蔓延する頹落ぶりは、玄白によってかくまで書かれるところにまで達していたのである\*。

\*大石慎三郎は近著『將軍と側用人の政治』を次のような言葉で結んでいる。「もし、田沼意次政権が倒れずに、『側用人の時代』がそのまま続いていたとしたら、その時点でおそらく通貨の一体化は実現していただろうし、鎖国も解かれていただろうから、日本は一世紀も早く『近代国家』に足を踏み入れて

(52) 同上書、239、252ページ

(53) 『荀子』「天論篇」にいう人妖、すなわち人妖（妖＝わざわい）である。施政が険悪なため、民心を失い、田は荒れ作物がよく実らず、穀物の値段が高くて民衆は飢え、路上に餓死者がでる、これを人妖という。そ

のもたらす災難ははなはだ悲惨である、とあるによる。藤井専英『荀子』下、新釈漢文大系6、明治書院、1959年、486－8ページ

(54) 玄白「後見事」前掲書、263ページ

いたと考えられる。しかし、現実には田沼政権はその道の途中で命を終え、その後百年間にもおよぶ混乱の時代を経て、ようやく日本は『近代』を迎えることになったのである。<sup>(55)</sup> わたくしはもちろん歴史学を専門とする者ではないが、はたして歴史的に客観的にこのようなことをストレートに主張できるのであろうか、はなはだ疑問に思う。氏は別の旧著『江戸時代』（中公新書、1977年）で、誤った田沼像を人々に与えた著作として辻善之助の『田沼時代』をつよく批判しているが、この著作は氏のいうように一面的に棄て去られるべきものではなく、今日なお積極的意義をもっているのではなかろうか。

## 2 「野叟独語」

これは、1807年、玄白75歳のときに、かつて兼好法師が「おぼしき事言はぬは腹ふくるゝわざ<sup>(56)</sup>」といったのを想起して、玄白が、自分の影法師と、憂国の思いのたけを語りあった文章、つまりその意味でのソリロキア（独語）である。野叟すなわち田舎の老人にかれは自分を擬している。1804年（文化元年）にはロシア使節レザノフが長崎に来航し、それにたいする幕府の応接の仕方に異論を唱える者は民間にも出てきており、ロシアのカムチャッカからのしばしばの南下にたいし国内に危機感がしだいに大きくなっていった時期である。つとにわが論客は、北方問題を重視しており、主なものでは、工藤平助の『赤蝦夷風説考』\*（1783年）が書かれ、林子平『三国通覧図説』（1786年）、『海国兵談』が刊行された（第1巻は1787年、全巻は1791年）が、1792年に発禁となり、また本多利明『西域物語』（1798年）が成稿をみている。玄白は、ロシアの来航にたいし正しく対応すべき日本側が社会的にいちじるしく頹廢し弱体化していることに深い憂いをいだき、黙っていられない熱き思いをせめて独白としてこの小論に託そうとする。

たしかに幕藩体制そのものにたいするかれの思想は少しもラディカルなものではなく、これまで徳川家の御大徳によってまことに太平であったのだし、これからは「如何せば此行末<sup>このゆくすえ</sup>万々年〔何万年〕も同じ〔徳川家のもとでの太平の〕御代にて過られ可<sup>すこせ</sup>申哉<sup>(57)</sup>」と、かれは自分の燈影に問いかけるのである。——江戸時代のたいていの思想家と同様、玄白もまた幕藩封建体制がいつまでも存続すると思い、他の社会構成に変わるであろうことなど、てんで念頭にいていない。

\*ベニョフスキー（当時ベンゴローウとよばれた）はハンガリー生まれの軍人で、ポーランド戦役に参加してロシア軍の捕虜となり、カムチャッカに流されたが、1771年に他の囚人たちと謀って反乱をおこし、船を奪って南下し、日本の沿岸を通して奄美大島に着きしばらく滞在した。そのかれがオランダの商館長にロシアが日本の侵略を計画しているとの情報を伝えたことから、日本に海防論がおこることとなった。工藤平助は、この情報を疑問と考え、ロシアの望んでいるのは日本との交易であり、それを許すべきであるとするなど、北方の経営にかんする諸対策を書いて、田沼意次に献上した。これが『赤蝦夷風説考』である。

玄白はしかし当面する危機に臨んで將軍にたいしてなかなかきびしい発言をしている。「東照宮〔家康公〕御骨を折らせ玉ひし御後<sup>つが</sup>を継せ玉ひ、此天下の主と仰がれ玉ひ、御代々様より当上様〔当代の將軍〕迄結構至極の御身の上にて、万民の膏<sup>あぶら</sup>〔万民が自分の勤勞によって得たもの〕を以て御育被<sup>あそばせられ</sup>遊候御身なれば、其代りに此節は格別御骨を折せ玉ひ、夷狄の鉄砲玉<sup>ひと かうん</sup>壱つ下民の頭の上を越させ給ひては、不<sup>あひすま</sup>相済<sup>ざる</sup>御事なれば、何分此天下不<sup>みだれざる</sup>乱<sup>なしくだされず</sup>様に不<sup>なしくだされず</sup>成下<sup>なしくだされず</sup>候ては、御申訳難<sup>たちかたき</sup>立事と奉<sup>たて</sup>存也<sup>(58)</sup>。」すなわち、外国人の鉄砲玉一つなりとも民草の頭上を

(55) 大石慎三郎『將軍と側用人の政治』講談社現代新書、1995年、239-40ページ

(56) 兼好『徒然草』19段、日本古典文学大系30、1958年、

105ページ

(57) 玄白「野叟独語」前掲、日本の名著22、293ページ

(58) 同上書、296ページ

飛び越させないようにしなくては、将軍様もまったく民草にたいし申しわけがたたないことだと思う、というのである。

それでは、ロシアの南下にたいしてどうすればよいか。玄白も、ロシアの願いは交易にあって頭から戦争をしかけるものではないだろうという考えをもってはいる。しかし、ともあれ、南下してくる以上、これにたいし、交易を認めるか、合戦して撃退するか、まずは、道は二つに一つであるとする。だが、いまさら先方の要求をいれるのも残念であり、むづかしい。さればといって、戦っても勝ち目はない。なぜなら、そもそも武士が柔弱になってしまっているからである。玄白はそのさまを次のように描いている、「今の世の武家の情態を見るに、二百年近く豊なる結構至極の御代に生長し、五代も六代も戦ふという事は露程も知らず。武道は衰へ次第に衰へ〔衰へゆくまに衰へ〕、何ぞ事あらん時、御用に立べき第一の御旗本、御家人等も、十に七八は其状は婦人の如く、其志の卑劣なる事は商賈しょうかうの如くにして、土風廉恥たふれんちの意は絶たる様なり。」<sup>(59)</sup>——ひとりのインテリが当代武士の柔弱さをどのようにみていたかがうかがえる。

このような状況のもとで、玄白の出してくる解答は、まずは江戸の警備に力を入れることが

第一であり、日本側もカムチャッカなどの実情を慎重にしらべておき、ひとまず、時代の動きを考えて万民のためにロシアとの交易を許すということである。そうしておいて、武士の軟弱な気風を一新し、嚴重な軍備をととのえる。このようにして、のちに一戦を交えねばならぬときのために備えておく必要がある。将軍家としては財政を抜本的にたてなおし、伝えきくような御台所や大奥の莫大な費用を削り、武士はそれぞれもとの用地に戻し、大名のうちから人材を登用して事に当らせる等々、抜本的な政治改革をおこなわなければならないとする。

このようにかれの用意する解答は、あくまで体制護持——もっとも、かれにはこれ以外には考えられない——のうえで外憂にたちむかおうとするところから出てくるものであり、その点では平凡なものであるとはいえ、ともかく玄白は夜も寝られぬ思いがするほど国情を憂えていたのであった。

蘭学の創始者としてオランダ医学の方法論を学んでいた玄白が同時代の社会についていだいた上述したような思考は、やがて30年ほどのちの対外問題がいっそう緊迫するなかで、渡辺崋山や高野長英らによってはるかにリアルな仕方でひきつがれることとなるのである。

(59) 同上書、296-7ページ